
銀魂

蘭奇

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂

【Nコード】

N5012L

【作者名】

蘭奇

【あらすじ】

ある朝、いつものようにボケ、ツツコミを繰り広げていた万事屋のメンバー。

公園に行った神楽は沖田に会う。

そこで沖田に頼み事があるから一緒に付いてきてほしいと頼まれて…………

朝は戦争（前書き）

初投稿なので駄作ですが温かい目で見守ってくれと嬉しいのです。

朝は戦争

「銀ちゃん、銀ちゃん!!」

綺麗なオレンジ色の髪をした青い目の少女。

ものすごい勢いで押し入れの扉を開けてまた叫ぶ。

「銀ちゃん!! 早く起きるアル!!」

「ああ?? なんだよ。朝ごはんならいらね・・・ガハッ!!・・・」

銀ちゃんと呼ばれた銀色の髪をした男。

そう、坂田銀時である。

銀時の上に馬乗りになつて尚も叫び続ける。

「銀ちゃん!! もうお腹ぺこぺこアルよ。いたいけな少女がお腹空かせて死にそうだってのに、平気アルかあ?? ねえ、平気アルかあ!??」

銀時は、殴られてパンパンになつた頬で必死に言葉を絞り出す。

「大人をぼこぼこにする奴を・・・この国じゃ・・・少女とはいわねえ。神楽、もうお前は・・・立派に独り立ちしてるよこれからは・・・一人でもやっていける・・・俺あ安心したよ・・・ガクッ」

少女の名前は神楽。

見た目は普通の女の子と変わらない可愛い少女なのだが

彼女は最強最悪と謳われる戦闘種族、絶滅寸前の夜兔族の一人であ

る。

「ぎ、銀ちゃーーーーーーーーーん！！ 誰がヤツ
タあー!?」

誰が、こんな事をしたアルかあ!!?」

さっきまで自分がしたことを忘れたかのように叫ぶ神楽。

「何してんだよ、神楽ちゃん。 ほら、姉上がお土産につて。」

いかにも駄目そうな眼鏡。 新・まあ、
どうせ後で名前が出るから紹介は良いだろう。

「何!?? 駄目つてえ!?! 何だよ、駄目つて!!
しかも、本体は僕であつて眼鏡じゃないから!! 、て僕は誰に突
つ込んでんだ。」

このダメガネの名前は新八。
物語の中で重要な役割を果たすツツコミ担当である。

「ギヤーギヤー煩えんだヨ、ダメガネ。 お前、眼鏡とつてタダの
駄目にすんぞコラ。」

ダメ・じゃなくて新八に辛辣な言葉を浴びせる神楽。

「何なんだよ!! 何これ? 何この扱い??」

そんなことより、とコホンと咳払いをしてから

「神楽ちゃあん? いつまで銀さんの上に乗ってるのさ??そろそ

るどいてあげなよ。
そのままじゃ起きるどころかもつ永遠に目覚めなくなっちゃうよお
??」

このままでは話が進まないと思ったのだろう。
新八は半分涙目になりながら、自分の役割を果たした。

「チツ、仕方ないな。どいてやるよ。」

いかにもつまらなそうに、吐き捨てるように言っ
て
渋々銀時の上から体をどかせる神楽。

「今チツて言ったよね?? しかも標準語だったよね??」

叫んで、新八はそつと眼鏡をはずして袴の裾で
目に光る滴を拭った。

「何言ってるアルか。この可愛い少女がそんな事言っように見える
アルか?」

「ああ?? どこに可愛い少女がいる。
モンスター一匹と眼鏡しかいねえよ・・・ゲボ・・・」

ようやく復活した銀時に容赦なく炊飯器を投げつける神楽。

「何やってんのぉ?? 神楽ちゃん!!
銀さん!! 大丈夫ですかぁ!!!?」

慌てて駆け寄る新八。
しかしその前に立ちはだかって無表情で

強烈な言葉を浴びせる神楽。

「騒ぐんじゃねえよ、眼鏡。この銀髪天然パーマの二の舞になりたくなかったら

さっさと飯作れよ。くそ不味いおめえの飯でも食ってやっからよ。

」

炊飯器を軽々と持ちあげてヒョイ、と新八の目の前に投げつけて不敵な笑みを見せる神楽。

対して新八はさー、と血の気が引いた顔をしてその場で立ちすくんでいる。

だがしかし、神楽のドスのきいた睨みで

そそくさとその場から逃げるように一階のスナックに向かった。

「全く、しょうがない奴らネ。ね?? 定春?」

犬と一緒にいたら声かけられやすくなる。

「神樂ちゃん、わがまま言ってお登勢さんからご飯貰ってきたよ。流し込まないでちゃんと噛んで食べなよ？うちだって家計厳しいんだしさあ。・・・あれ？？ 神樂ちゃん？？」

両手で重そうに炊飯器を抱えて部屋を見渡す新八。

しかしそこには完全にのびきっている銀時と新八の姉お妙からのお土産が入っていただろう袋が空になって窓から吹き込む風になびきながら音を立てていただけであった。

「どこに行つたんだろう、神樂ちゃん・・・」

「定春う！！ こつちアル！！」

その声に反応して容赦なく飼い主に突進する定春。普通なら相当の打撃だがそれをもとめない神樂。

「おうチャイナあ。 またその巨大犬と格闘ごっこかい？」

振り返つてキツ、と声の主を睨みつける神樂。そこにいたのは亜麻色の髪をなびかせる美青年、沖田総悟。

「何なんダヨ、テメえ。 そっちこそまたサボリか？」

沖田に闘争心むき出しの神楽。

しかし沖田は涼しげな顔で、

「決めつけはいけねえ。ちゃんと仕事してるじゃねえかい。」と軽く受け流す。

「どこをどう見ておめえがちゃんと仕事してるように見えるんだヨ。明らかにさぼってんじゃねえかヨ、この税金泥棒が!!」

今にも掴みかかりそうな神楽を尻目に
沖田は少し声を落としてこう告げた。

「実はさあ、チャイナ。俺からおめえに
折り入って頼みがあるんでい。」

「何ダヨ、怪しいな。大体そういう時は碌な話じゃないアル。」
訝しげに言い放つ神楽に沖田はフツ、と口元を緩めて
こう付け加えた。

「あれえ?? チャイナあ。断るんですかい?
これが成功した暁には、おめえにもたんまり謝礼がでるはずなんだ
がねい。」

「な、何が貰えるアルか??」

沖田の言いなりになるのは癪だった

謝礼が出ると聞いてはどうしても気になって聞いてしまう神楽。

予想通り沖田は不敵な笑みを浮かべて、

「気になりますかい？」

、と挑発するように聞いてくる。

「な、何を言うアルか。毛ほども気になって何かいないヨ。」

「そうかい、それじゃあ仕方無い。

別の奴に頼むとしますかねい。」

「ま、待つアル。」

「何ですかい?? 俺あ忙しいんでさあ。」

「き、気になるアル。」

「え?? 何て言っただんですかい??

最近耳が遠くなっただみたいでさあ。」

「こ、この野郎……」

気になるって言ってんだヨ!! 悪いか??」

沖田のからかいに頬を赤く染めながらも
恥ずかしがっている事に気づかれまいと
大声を張り上げて必死に誤魔化す神楽。

「冗談でさあ、冗談。謝礼は成功してからの
お楽しみでさあ。とりあえず一緒に来てもらっ
ぜい。」

美味しい話には必ず裏があると思え

「で、何でこんな所に来ているアルかあ？」

あからさまに不満そうな声を出す神楽。

「シィっ！ 静かにしろい。 奴に気づかれちまう。」

「何当たり前みたいに言ってるアルかあ！！」

おまえいつもこんな事をしているアルか？？」

「当然だろい。 奴の行動は何一つ見逃すんじゃねえぜい
・・・ツッああ！！ てめえチャイナ娘え！！ 何しやがんでい！
」

神楽が思い切り沖田の頭を殴った。

相当苛立っているのか額に青筋が浮き上がっている。

「こんちきショーー！！ 騙したナ？？ 何がたんまりと
謝礼が出るアルか！？？」

「騙される方が悪いんでい。 世の中、
騙して得する奴と騙されて損する奴に分かれるんでい。」

「何シャーシャーと汚え事ぬかしてるアルか！？
おめえそれでも役人アルかあ！？」

「汚い目にしか見えないもんが有るんでさあ。
じゃの道には蛇ってやつでさあ。」

それに騙したわけじゃねえぜ？？
ちゃんと謝礼は出まさあ。」

「本当アルか？？ 何アルか！！」

「酢昆布三つでさあ。」

当たり前のように言う沖田に神楽が殴りかかるうとする。

、が簡単に避けられてしまい今度は沖田が神楽に
ローキックをくらわせようとし、かわされる。

お互い目的を忘れて取っ組み合いを始めた、その時。

「おーい、てめえらあ。 なあに人の部屋でいちやついてやがる。」

神楽以上に額に青筋を浮かばして、こちらを見ている人物。

新選組副局長、鬼の副長と恐れられる土方十四郎。

「銀さあん、やっと僕らのでばんですよあ。」

「、つたくよあ。 新八はともかくよあ、 主人公の俺様が
こんな扱いなんてよあ。 全く、新八はともかくよあ。」

「何なんすか、その僕はともかくって！！ 何だよチクショー！あれ？？ 何だか視界がぼやけて・・・眼鏡は？？ 眼鏡はどこ？」

「落ち着けえ、新八い。眼鏡ならちやあんとかがつてる。

それはなあ、哀しい時、苦しい時に目からこぼれ落ちる、

言わば我慢の証なんだよあ？？ 大丈夫だ。 そのこぼれ落ちる

滴の数だけ強くなれるんだよ。 あれだ。 そういう歌あったら

う？？

こぼれ落ちる滴の数だけつよくなれるよ♪ ♪ みたいなあ？？」

「みたいなじゃねえよ！！ 普通に泣いて言えよあ！！

涙の数だけ強くなれるよ、アスファルトに咲く花のように♪ ♪だよ

！！」

ツツコミながら新八はこんな事してる場合じゃ無いのに、
と思っていた。

早く話を進めないと今度こそ自分の出番が無くなってしまふ、と。

銀さんは主人公だから1話の2、3セリフしか言っていないくても
何とか出番にありつける。

しかし、自分のような地味キャラが話を進めるだけしか能のない地
味な

ツツコミキャラがこんな事していると確実に出番を奪われてしまふ、
と。

しかし、新八は気付いていなかった。

新八の心の中である今のこれこそが、

一番どうでもいい事で、物語の進行の邪魔だという事に。

ピンポン。

「あ！ お客さんだ！！」

新八はホッと胸をなでおろした。

このまま、ダラダラしていると完璧に神楽や沖田の方の話に戻ってしまうから。

「はいはい。」

「おお、新八君。 実は君達に折り入って頼みがあつてな。」

「こ、近藤さんじゃないですかあ。」

この男は、近藤勲。

泣く子も黙る武装警察新選組の局長である。

「ああ、何だあ?? ゴリラの押し売りかあ??
大丈夫でーす。 うち、定春つてのがいるんでえ!!
もう、とつくに定員オーバーですー!!」

ソファーに座って鼻くそをほじりながら
適当に返す銀時。

「ちょ、銀さん違いますから。 ゴリさ・・じゃない
近藤さんですからあ!!」

「今確実にゴリさんって言おうとしたよね??」

ねえ、言おうとしたよね!？」

「ああ?? 近藤?? ゴリラも近藤も似たようなもんじゃねえかあ。断つとけ。」

「銀さん、酷いですよ? 何ですか?? 出番少ないからって八つあたりですかあ??」

「バツカ、おめえ、そんな訳ねえだろうが!! 神楽や、あのドS野郎はともかく新八にまで

セリフの数負けるようになったら終わりだなんて思ってたねえよ?? もし、思ってたもおめえ、口が裂けてもそんなこと言えねえよ??」

「言ってるんじゃないですかあ!! 全部赤裸々に暴露してんじゃないかねかよ!!」

もうちょっとオブラートに包めよ、せめてよお!!」

何だっつてんだよ、チクショー!! てか、僕何回これ言っただけ??

これ絶対あれだよ。作者の行埋めだよ。ネタが無いからこんなんで潰してんだよ、多分。

「あのお、そろそろ依頼の内容、てか本題に入っても良いかなあ??」

嘘を平気でつくような奴に碌な奴はいない

「総悟お、万事屋んとこの怪力娘まで呼んできて俺を本気で殺るきかあ??」

こぶしを握る強さや、額に青筋を浮かび上がらせているところから相当キレてる様子がうかがえる。

しかし沖田の方も慣れている様子でしれっと言い返す。

「何言ってるんですかい、土方さん。

マヨの摂りすぎで頭までやられちゃいましたかい？土方さんが安心して過ごせるようにチャイナまで呼んできて一緒に護衛してるんじゃないやせんか」

「おお、そうか総悟お。じゃあその左手に持っているバズーカはなんだあ??」

沖田がそつと後ろに隠そうとしている物を指さし怒りでワナワナと震える土方。

「ん訳無いでしょうが、土方死ね。ついに頭だけじゃ無くて目もやられましたかい??」

「今小さく土方死ねつつたよなあ??
総悟お 剣を抜けええええええ!!」

言い終えると同時に刀の柄に手をかける土方を見て

、
これだから土方さんは。二言目には切るでいけねえや。

、
と言いつつ猛スピードで振り下ろされる刀を

ヒョイ、とかわし不敵な笑みを浮かべる沖田。

亜麻色の髪を靡かせ、いつの間に柄に手をかけていたのか、
ビュンッと風を切りそのまま抜き去った。

冷たい風が吹き抜ける。

沖田の刀の先には新選組の制服。

「ふん、やったかい。」

これで、副超の座は俺のもんでさあ。

みんなああ！！ 来てくれえ！！

土方さんがあ、土方さんがああ！！！！」

「おおい、総悟お。俺が、何だつてえ??？」

背後に気配を感じて沖田の頬に
冷や汗がツーツと流れ落ちる。

「おい、総悟お。敵の生死を確認するまでは
安心するなと言ったはずだろ??」

剣を振り下ろす土方。

パキッ。

音を立てて沖田の刀にひびが入る。

「本物の戦場なら、死んでたぜえ??」

そう言いながら、剣の先から服を引き抜き、それを振り回しながら去って行く土方。

「クソ、一本取られたぜい。」

「本当。お前の完敗アルな。」

それを聞いて沖田は少し気に食わなさそうにそつぽを向いたが、何を思ったか急に、

「おい、チャイナあ。この事は旦那には内緒で頼むぜい。」

、と神楽の唇に人差し指を当てながら囁いた。

「な、何言ってるアルか。」

こうなったら皆にばらしてやるヨ。江戸中に貼り紙して廻ってやるネ。おい、コラ覚悟シトケヨサド!!」

顔を真っ赤にして抗議する神楽。

しかし、沖田は全く同時ずにこの状況を楽しんでる様にも見える。

「へえ、そいつぁ楽しみだぜい。

つまりチャイナは俺の為にそこまでやるって事だろい?。」

グイッと神楽に顔を近づける。

二人の顔の距離はもう数十センチ程しか開いていない。

大きな赤褐色の目が神楽を見つめる。

顔から火を噴いたように顔を真っ赤に染める神楽。

スツと沖田の手が神楽の手の方に伸びて手を握る。

「な、何するアルかそれ以上近づいたら許さないネ」

「許さないって何をするのかねい??」

ちっとも見当がつかねえぜい。

じゃあこうしたら。 どうなるかねい??」

数十センチ程だった顔の距離が一気に近づく。

「や、やめるアル。 本当に、

本当に許さ……。」

神楽が最後まで言う前に

沖田は神楽の手の中から

酢昆布をヒヨイとかすめ取る。

「チャイナあ、なあに赤面してるんかい？
俺がお前に何かするとも思ったのかい？？」

お前の完敗でい。」

ニタニタと笑みを浮かべながら
してやったり顔の沖田。

「チキシヨーー！！ 騙したナ！！
サド！ てめえ、許さないアル！！」

沖田は表情を変えることなくニタニタと笑みを浮かべる。

「・・・っ。 一本、取られたネ。」

知らないおじさんとゴリラには要注意

本題。

そう聞いて新八は改めて思った。

いつもは、姉上に付きまどっている
ストーカーだけど、今回は違う。

どこが??、と聞かれると困るけど
身にまどつてるオーラのものが違う。

要するに雰囲気。

それがいつものストーカーのとは違つて
侍になつてる。

ような気がする。

それにしても、さつきから誰も一言も喋らない。

いつもなら気を使う事なく本題が何か
問う事が出来るのだが、

今日はそれを尋ねることさえも
容易ではなかった。

近藤と銀時、二人の目の色。

二人を包む妙な緊張感。

加えて、異様な程の場の静けさ。

その全てから、新八は声をかけられずにいた。

しかし、この空気には新八が一番耐えられなかった。

「あ、あのお、近藤さん。それで、
依頼の内容って何ですか??」

堪え切れなくなつてついに新八は
重い口を開いた。

口の中はカラカラに乾いていて、
久しぶりに開いた口からは
上手に言葉が出てこなかった。

近藤は、そんな新八に気付いたのか
新八の方を見て少し口元を緩めたが
すぐに険しい表情になった。

「ああ。そのことだが。」

桂小太郎の逮捕に協力してもらいたい。」

言い終えると、30分以上も前に新八が
出したお茶を一気に飲み干した。

額には汗が滲んでいる。

それを見て新八は本気なんだと悟った。

今日の近藤の雰囲気が違う理由。

それは、新選組の局長の立場として
万事屋に依頼に来てるからだ。

近藤が本気なのは分かった。

しかし、新八は簡単に決断を下せなかった。

何より、桂は銀時の古い友人であり、
新八自身も助けられたことがある。

困って銀時の方を見ると、
考える素振りを少しも見せない。

さっきと同じように近藤を見ている。

「酷な事を頼んでいるのは分かっている。
酷い話だと思う、俺だって。」

でも、仕方が無いんだ。こうするより、他に……」

「要するに、てめえら新選組の手にゃあ負えねえから」

桂の知り合いの俺たちに協力してもらおうってかあ？？」

冗談じゃない、とでも言うように

フン、と鼻をならす銀時。

その眼にはさっきのような鋭さは無く、
いつもの虚ろな目に戻っていた。

「桂がお前の戦友だって事は分かっている。

攘夷戦争の時、お前らや高杉達と一緒に戦った
仲間だって事も、重々承知の上だ。

でも、攘夷戦争の英雄も

今では反乱分子以外の何物でも無い。

俺は奴らがしている事が必ずしも全て
正しくないなんて思っちゃいねえよ？？

だが、幕府の敵である限り、俺たちは
奴らを斬るより他、致し方ねえんだよ。」

「幕府の敵、ねえ。

そんなもん一般市民の俺たちには
さらさら、関係ねえ話だ。

幕府が滅びようが、てめえら新選組が潰れようが
国が滅びようが知ったこっちゃ無えよ。

桂が捕まろうが、構わねえ。

でもそれは、てめえらの仕事だ。

俺たちが手え貸す理由なんてねえな。

それに、てめえらがいくら汚え手使った
ところで奴捕まえんのは無理だと思うけどな。」

確かに近藤さんの言ってる事は少し
酷い気もする。

しかし、新八は否定する気になれなかった。

確かに桂さんは、悪い人とは思えない。

でも、近藤さんの言った通り幕府の敵で
ある事には変わりはない。

双方から同じくらいの強さで引つ張られ、
どうしていいのか分からなかった。

そんな中、近藤がすまなさそうに
でも、迷いの無い声で言った。

「仕方ない。おいお前たち、つれて行け。」

女子も男子も結局ねちねちしてるのに変わらない

「おい、ゴリラあ。

これは一体何の真似だあ??」

銀時の周りには近藤と同じ

新選組の隊士が銀時に剣を向けていた。

「何の真似だじゃねえよ。

見たとおり。

幕府に逆らうなんざ切腹もんだよ??

しかも攘夷志士庇うなんざ、分かりやすい。

取り調べだ。署まで御同行願います。」

いかにもそれらしい事を言う土方。

近藤はすまなさそうに俯いて一言も話さない。

「何言ってますか!! 土方さん!!

桂さんと僕達の関係なら分かってるでしょう??」

「何の話だあ?? さっぱり分かんねえなあ。

おめえらが桂と関係してるってんなら、話は早いんだがな?。」

新八の悲痛な叫びは土方には届かず

見せつけるように手錠を取り出す土方。

「つでも、近藤さんだつて僕達と桂さんの関係なら

重々承知の上だつて言つてたじゃないですかあ!!。」

助けを求めるように近藤に向き直る新八。

しかし近藤は、新八が求める答えは出してくれなかった。

「そんな事、言つてない、筈だが。」

近藤には絶え絶えにそれを言うのが精一杯だった。

近藤は嘘が下手だ。

おまけに人が良くて

土方や沖田みたいに平気で嘘がつかない。

それを思うと近藤が少し不愠な気がしたが
今自分が置かれてる状況を考えるとそうも言つてられない。

「言いましたよ！！ 酷い事してるのは分かってるって！！

ねえ、近藤さ・・・え??？」

カチャッ。

新八は必死に状況を整理しようとした。

しかし、それは彼にとっては難しい事だった。

何故自分が手錠をかけられたのか理解できない。

でも、答えはすぐに出た。

「はい、1時23分。 公務執行妨害で逮捕。」

「てめ、ふざけんじゃねえぞ。

いつ俺たちが仕事の邪魔なんてしましたかあ??？」

「してんじゃねえか。 現在進行形で。

お尋ね者逮捕の邪魔してんだろつがよ。」

「邪魔なんてしてませんー！。

面倒くさいから協力しなかっただけですー。」

「やっぱり、色々言っという結局面倒くさいだけなんじゃないですかー」

そういう無気力な態度が前から気に入らなかったんですー。」

「私も前からご飯にマヨネーズかけるなんていう異常な

食の好みが気に入らなかったんですー。」

「異常じゃありませんー。至って正常ですー。」

それよりも、小豆かけて食べる方がよっぽど変ですー。」

「そんな事無いですー。みんな言ってますー。」

マヨネーズかけて食べてるのを見ると気持ち悪くなるってー。」

「そんなこと言ってるけど、私も聞きましたー。」

あの天パ見てると何だかイライラするってー。」

「それじゃ、私も聞きましたー。」

あの、瞳孔開いた目見てるとむかつくってー!。」

「やかましいわあああああああああああああああ!!」

何、お前らあ?? 女子ですかあ??

遠まわしに嫌み言いあう女子高生ですかあ!!?」

はああ。

何で僕の周りには馬鹿ばかりなんだろう。

そう思いながら新八は今日何度目かのため息をついた。

体育祭とかで女子が見てるとやたらリーダーぶる奴居るよね

まあ、なんやかんやで手錠を外してもらった訳であるが

形勢はさっきより此方の方がかなり不利なのである。

先程までならたかだかゴリラー一匹。

適当にあしらっておけば良いのだが、

土方がめっちゃ此方を見ているのである。

もう、瞳孔が開いてる目でめっちゃ此方に

ガンを飛ばしてくるのである。

それに手錠を無意味にガチャガチャさせながら。

ニヤニヤと口元を緩ませながら。

その威圧感に少々額に汗を滲ませながら

チラッと銀時の方を見やる新八。

しかし、さすがは銀時と言えは良いのだろうか
緊張感の欠片も感じられない。

来客用ソファーにふんぞり返って

小指で耳垢を穿っている。

あ、今飛ばした。

軽く、軽蔑の視線を銀時に向けた後

再び土方たちに視線を戻す。

あれ??

何か増えて無い??

眼鏡を外してごしごしと袴の裾で拭く。

数え直してみる。

1、2、3、・・・・・・。

うん。

増えてる。

やっぱり増えてる。

・・・・・・。

「、ていうか神楽ちやあああああん！！！！！！

何で混じってるのおおおお！！！！

てか、何で馴染んでるのおおおお！！！！」

不自然なほどに新選組のメンバーに馴染んでる神楽。

いや、それはある意味自然か。

いや、でも元々新選組メンバーでは無い神楽が

馴染んでるのはある意味不自然。

あれ???

訳分かんなくなってきた。

あれがあれで、これがこれ。

それは？ これ？？ であれ？？

いや、今のあれ？？はあれのあれじゃ無くて

あれ？？の方のあれ・・・・・・ あれ？？？？？？？？？

「おい、地味。 うるせえんだヨ。

物語の進行の妨げしてんじゃ無えヨ。

もうこれアニメだったら放送事故だヨ。

作者の一身上の都合で・・・・・・・・・・

ってくらいぐだぐだじゃねえかヨ。」

「はい。 この怪力娘の言うとおり。

、て事で桂の逮捕協力よろしく。」

神楽に便乗して土方が畳みかけてくる。

「ま、それは良いんですけどね？」

この際。 もう良いんですけどね？？

でも、捕まえるったってどうやって？？

僕らも知り合いってだけで桂さん達の

拠点なんて知らないんですよ？」

.....。

「おい、今なんつった？？」

え？？

「てめ、こんだけ人の貴重な時間奪つという

どんな事もしらないのか？？ 新八君よおお。」

殺気立った目で新八に睨みをきかせる土方。

あ、やべ。

おーい、お前らあ。

やつてもおたれやあああああああ！！！！！

土方の掛け声と共に一同が襲いかかる。

あれ？？

何か沖田さんも混じってなあい？？

いつの間に？？

てか、銀さああん！！

何あんたも溶け込んでるんですかああ！！

あんたはこっち側でしょおお！！

てか、神楽ちゃんも！！

そんな新八の心の叫びなんて

知るはずもない新選組＋2人は

新八に殴る、蹴るの暴行を加えた後

首を絞め、眼鏡を粉々に砕き

顔に落書きをし、小枝のさきつちよで突き

その他もろもろ色んな事をした。

まあ、聞こえていてもしただろうけど。

そんな時神様の声が聞こえた。

ピーンポーン。

「桂ですけど。」

銀時はそこに居るか。」

人生、十中八九上手くないかない

桂の身を少し案じてみたりもしたが

助かった。

真っ先に新八の脳裏によぎったのは

ただただ、その思いだけであつた。

だつて、仕方ないよね？？

人間なもの。

いつの間にか元通りになっている眼鏡を

かけ直しながら新八は、そんなこと思った。

「そこに居るのは分かつておるのだぞ。」

中の様子なんて知るよしもない桂は

尚も銀時を呼び続ける。

それを聞いて少し哀しい気持ちになった新八。

だが、0・2mもそんな気持ちを持ち合わせていない

神楽と銀時は、やる気満々。

「しょうがねえなあ。」

「仕方無いアルネ。」

等と言いつつ、どこから持ってきたのか

新選組の隊服に身を包んでいる。

土方の、桂を捕まえたらしは

謝礼がでる。

という言葉に反応したのだろう。

つくづく情けない。

「おめえらあ。準備は良いなあ??」

俺の掛け声で一斉に行け。

扉なんて壊すつもりで行け。行くぞ?」

3

2

どか――――ん!!!!!!!!!!

激しい爆風と共に有言実行、

扉をぶっ飛ばした沖田。

「いや、なんだかんだで結局それ？？」

別に良いんだけどね？？」

「いやあ、ちと俺の出番が少なすぎると思いやしてね？」

本当すいやせん。」

そう言った沖田の態度からは

反省のはの字も感じられなかった。

もとい反省する必要など無いのだから

仕方ないのだが。

いや、無くは無いのだが。

扉とともに吹き飛ばされてしまった人物。

勿論、言わずと知れたあの人である。

その人の生死が気になり

傍に駆け寄る新八。

「あれ?? 何か銀さんに似てない??

髪の毛。」

新八の地味な呟きは昼下がりの江戸の空に吸い込まれていった。

今日も

江戸は平和である。

人生、十中八九上手くないかない（後書き）

いやはや、ここまでくると凄い

としか言えないほどの駄作でしたね。

読んでください本当ありがとうございました

その言葉に尽きますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5012/>

銀魂

2010年10月9日23時10分発行